

『おくのほそ道』と自作俳句

— 総合教育科目における学習意欲を高める試み —

The Narrow Road to Oku and composing a Haiku

— a way to motivate students to learn in general education courses —

馬場 治

Hajimu BABA

〈要旨〉

ここ数年、本学の総合教育科目の一つである「日本文学」において経済学部および人間科学部の学生を対象に『おくのほそ道』の授業をしている。当該科目は基本的に講義型であるが、文学部の学生を対象としないので、伝統的な授業スタイルでテキストを講読し解釈と鑑賞をするだけでは、受講生は退屈してしまう。関連する名勝や故地を案内する視聴覚教材を使用するのもよいが、それだけでは学生の積極的な授業への参加は望めない。そこで、「俳句は骨さえ掴むことができれば自分にも詠める」という自信を学生に持たせ、読解力だけではなく表現力をも養い身に付けさせる方法として自作俳句を試みた。出席カードの裏面へ自作俳句を記し提出。次回までに最も秀でた句を選定し紹介した。更に、季語や地名についてデジタルカメラの映像も活用するよう指導した。その結果、俳句の言葉と対象の景物が結び付き具体的なイメージを描けるようになり、学習意欲が高まった。

〈キーワード〉

松尾芭蕉 おくのほそ道 自作俳句 季語と地名

一 地元ゆかりの古典文学『おくのほそ道』

松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』は、俳句を愛好する人々にとって聖典である。また、ドナルド・キーン氏の英訳¹⁾を始め、日本古典文学を愛好する世界の人々にもよく知られている。それ故、一般の人々にとってはやや敷居が高い印象を受ける。しかし、地元ゆかりの名勝や故地が登場する場合には一転して親近感を抱く。その点を活かし、経済学部を受講生には観光的な視点から、人間科学部の受講生には教

材的な視点から、なるべく自分の専門分野に引き寄せながら学習意欲を引き出す。

加賀路は大垣までの帰路に当たる。高校古典では、「旅立ち」「平泉」「立石寺」「佐渡」等とは違い、教科書に載せられることはない。それは、芭蕉が旅に出た四つの目的、「自然との一体化」「先人の旅の追体験」「歌枕や古戦場の確認」「風雅の人々との出会いや門人との交流」のうち最後が強く出た、しかも「一笑との死別」「曾良との離別」を主題とする異質な章段であったからだと考えられる。しかし、当然ながら地元の地名や身近な故地は登場するのであり、ローカルだが「自分の家の近

所だ」「行ったことがある場所だ」というだけで、興味関心の度合いは高まる。

例えば、金沢市野町は願念寺の一笑塚である。金沢の一番弟子であった小杉一笑が半年前にこの世を去っていたことを知り、芭蕉が追悼の席で悲嘆に暮れ慟哭して「塚も動けわが泣く声は 秋の風」と詠んだ句碑もある。観光客で賑わう妙立寺（通称「忍者寺」）の近くで一足伸ばすだけで訪ねられる。自分の目で見ることのできるモニュメントである。文学散歩を兼ねた観光案内としても手頃であろう。

また、毎年新入生研修で訪れる山中である。散策路には芭蕉堂や投句箱があり、当地に逗留した際の記録を収集した芭蕉の館もある。芭蕉は温泉の効能を「山中や菊はたをらぬ 湯の匂ひ」と地名を初句に据え賞賛したが、曾良は病気のため「行ききて 倒れ伏すとも 萩の原」と覚悟の句を書き残して芭蕉と別れた。芭蕉は「今日よりや 書付消さん 笠の露」と一人旅になる決意を新たにした句を詠んだ。

両者の中間に位置する宿場の小松には、『平家物語』巻七の加賀国篠原の戦いの逸話に登場する、老齢で白くなった鬢や髭を黒く染め、大将の甲冑で装い、平家の公達になりすまして木曾義仲の家臣手塚光盛と戦って討ち死にを遂げた斎藤実盛もいる。義仲にとって実盛は、亡き父の代わりに幼時養育してもらった恩人だった。その甲が奉納された多太神社に詣でた芭蕉は「むざんやな 甲の下の きりぎりす」と哀悼の句を捧げているが、上五は、首実検の儀式において首洗池で実盛の首級だと判った際、樋口次郎が首級に涙を流し、「あなむざんやな、斎藤別当で候ひけり」と悲嘆した言葉から借りたものである。義経弁慶主従と奥州藤原三代が滅びた悲劇の舞台の平泉の段と同じく、忠節を貫き敗れ去った武将への同情が滲み出る。

右は、未来のある若者等に「死別」や「離別」といった「生者必滅会者定離」の道理を考えさせる機会になるとともに、その際の心境を俳句として書き留めることによって時空を超越した絶唱となり、後生の共感を呼ぶことを示唆している。だが、ともすれば若者はこのような重い主題を忌避する傾向があるので、解釈と鑑賞ならともかく、自作俳句では控えめにし、受講仲間の共感を呼び情操が豊かになるような「身近な風物詩」「古里の美しい景物や景観」の方を主眼に指導すべきであろう。更に、互いに作品を披露し合う機会を設けることによって、同じ季語や景色を題材にしても、観察・発想・表現の違いから十人十色の俳句が生まれることに気付き、その多様性こそが俳句の魅力だと分かれば、創作意欲もより高まるものと期待する。

二 テキストおよび視聴覚教材

二― テキストについて

『おくのほそ道』のテキストは数百種にもなるが、文字情報（原文および現代語訳）と図版のバランスがよい、ハンディで廉価なものを選択しなくてはならない。経験的な自戒を込めてのことだが、くれぐれも『おくのほそ道』の専門的な知識（崩し字の翻刻や写本の系統など）を伝えようなどと意気込んではいけない。あくまで一般教養的な科目であることを念頭に置きつつ、「分かりやすく楽しい」「面白くてためになる」（授業評価アンケートの好意的なコメント）と多くの受講生が感じられるような内容構成と雰囲気づくりに努め、「全体像を捉えて広く浅くではあるが、芭蕉の旅を追体験できた」と実感させることが大切であろう。追体験とは实地踏査だけではなく、解釈と鑑賞や自作俳句も含め、俳句の言葉から対象や場面をイメージできることだと考える。作品を読まずに疑似体験で満足してはいけない。

故に、食わず嫌いにならないような先の諸条件をクリアするテキスト選びは難しいが、行き着いたのは、『ビギナーズ・クラシックス おくのほそ道（全）』（角川ソフィア文庫、二〇〇一年七月）である。本書は、出版社の広告文に「声に出して読もう！芭蕉と一緒に旅する、予備知識不要の古典シリーズ第一弾」「俳聖芭蕉の最も著名な紀行文、奥羽・北陸の旅日記を全文掲載。ふりがな付きの現代語訳と原文で朗読にも最適。コラムや地図・写真も豊富で携帯にも便利。風雅の誠を求める旅と昇華された俳句の世界への招待」と謳われているとおりで、値段も六二〇円と廉価である。付録『おくのほそ道』探求情報も「詳しく深く」の発展学習に役立つ。目次（地名を主とする章段名と各トピック）、旅程図、芭蕉年譜、俳句索引も有用。まず、「知らない街を歩いてみたい どこか遠くへ行きたい 知らない海をながめていたい どこか遠くへ行きたい 遠い街 遠い海 夢はるか 一人旅」（永六輔作詞）の有名なフレーズに象徴されるように、人には誰しも平凡な日常生活から離れて知らない土地を旅してみたい、見たことのない景色を眺めてみたいという普遍的な欲求があることに気づかせる。何人かに自らの旅行の体験を発表してもらい、「可愛い子には旅をさせよ」「旅の恥は掻き捨て」「旅は道連れ 世は情け」等、旅にまつわる諺を調べさせ、「人生にとって旅の意義とは何か」について考えさせる。

次に、口絵の森川許六（門弟で画家）筆『芭蕉行脚図』（天理大学附属天理図書館蔵）を見て芭蕉と曾良はどのような人物であったかを想像させる。本画は、芭蕉が『おくのほそ道』を執筆中の元禄六年（一六九三年）に描かれたもので、芭蕉存命中の作品であることから、当時の旅姿が忠実に描かれ、芭蕉晩年の顔立ちもこれに近いものだったと推測されている。年齢・出身・経歴・間柄などの基本情報は後ほど明かす。「人生五〇年の時代に晩年の四六歳で持病を抱えながら、おくのほそ道への旅に出かけ、五ヶ月かけて約六〇〇里（二四〇〇km）を歩いた」ことが分かれると、驚嘆の声が上がる。そこで、江戸は元禄時代の芭蕉の旅と現代における自己の旅の経験とを比較させる。決して「安全で快適」な旅ではなかったことが分かる。逆に、「どんな旅だったのだろう。交通や宿泊、装備や費用は？」といった関心が高まる。そこで、芭蕉の足跡を曾良随日記の日付入り地名で示した旅程図を参考にしつつ、深川から大垣までは日光路（深川・蘆野・奥州路（白河の関・平泉）・出羽路（尿前の関・象潟）・北陸路（越後路・大垣）の四つの区域から構成されていることに気づかせる。各章段においては、訪れた地名と出会った人名を必ず確認させる。この作業は漠然とした旅のイメージに個別性と具体性を与え、認識を新たにさせる。

次に、「いつ、どこで」の「いつ」の方に注意を向けさせる。草加の段の冒頭原文「ことし、元禄二年にや。奥羽長途の行脚ただかりそめに思ひ立ちて、」は、「今年はたしか元禄二（一六八九）年になるはずだが、奥羽（東北）地方の長旅を、まったく突然に思いついたのだった」と文面どおり受け取ってはならない。これは偶然を装ってはいるが、「西行没後五百年忌」と「伊勢神宮式年遷宮」が重なった類い希な年回りを故意に狙っていたのである。芭蕉は、周到に旅支度をして臨んだ。敬慕する先達と尊崇する神様に旅程の完遂を祈願する俳諧人生の正念場であった。

紀行文の形式は、地の文が出来事を実録と虚構を交え書き記す経糸の散文、発句が最も興味を抱いた対象の景物（季語）についての感慨を詠じる緯糸の韻文である。学生には、芭蕉の経歴や作品の内容に関する基本的な知識を授けるだけではなく、元禄時代には身分では最下位の商人が財力を持ち町民の現世享樂的な文化が興隆し、『好色一代男』など浮世草子の井原西鶴、『曾根崎心中』など人形浄瑠璃の近松門左衛門といった芭蕉のライバルもいた等、歴史を俯瞰する視点も身に付けさせたい。

その上で、都会の大衆に迎合する商業的な出版文化や名聞利養の風潮に馴染めず、俳諧を生業として選択し風雅の境地を求めた芭蕉の人生について改めて考えさせ、刹那に移り行く属目の感動を永遠の言葉へと凝縮した芭蕉の理念と技法を理解し、自身の言語感覚を磨いた表現手段としての自作俳句へと繋がるよう指導してゆく。

二―二 視聴覚教材について

なるべく全行程を網羅しつつ、トピックとなる地名の章段を押さえた視聴覚教材が望ましい。また、現代の旅人が登場し、自分の足で訪れ、自分の目で見るという仕掛けになっている方が解説的なナレーションだけのものより感情移入をしやすい。この二つの要件を満たし、各回の放映時間が二五分程度の視聴覚教材として選んだものが、『風に誘われて芭蕉の山河に遊ぶ おくのほそ道を歩こう』（NHKエデュケーショナル）と『森村誠一 謎の奥の細道をたどる』（角川映画）である。前者の旅人は、俳人の黛まどか氏と俳優の榎本孝明氏。後者の旅人は、作家の森村誠一氏と編集者の永井草二氏である。

テキストによる解釈と鑑賞が一区切りしたところで、復習として当該章段に関連した箇所を放映すると、「文章を読むより映像を見る」のビジュアル世代の若者にとっては認識が深まるようである。出席カードのコメント欄にも「本文では」より「映像では」の記述が目につく。文章から場面を脳裏に思い浮かべることは容易ではないので、補足教材として有効である。映像から再び文章に戻ると親しみが増す。両教材は案内人である旅人自身が芭蕉の発句に触発され一句を創作しているので、自作俳句に向かう参考にもなる。女性俳人と男性作家の視点や表現の相違も面白い。例えば、「閑かさや 岩にしみ入る 蟬の声」で有名な立石寺における榎木氏の初めての一句「俳聖の登りし道に 風薫る」に黛氏は、「空間の広がりが出ていて、芭蕉の時代と今が繋がっているような感じがします。ただ、『登りし道に』だと説明的になるので、『や』という切れ字を使って、『登りし道や』にしたらどうでしょう。切れ字を使うことで、一句を二つの世界に分けることができます。『登りし道に』だと下の句との足し算だったのが、『や』と切れを入れると、下の句との掛け算になって、一句のイメージが広がるんです。それを『切れの効果』と言うのですが」と適切な添削アドバイスをしている⁽²⁾。俳句による情景の切り取り方の骨である。

森村氏は写真俳句にも造詣が深く、角川歴彦氏の勧誘により「平成の芭蕉」として「元禄の芭蕉」の名句に潜む謎に挑戦するに際しては、「私は当時の芭蕉が手にしている文明の利器を少なくとも二つは持っていることを知った。一は速度であり、二は情報を収集したり記録する機械、つまりカメラである。芭蕉が決して持ち合わせていなかった文明の利器を駆使して、おくのほそ道を駆け通せば、芭蕉が見たものを見過ごす虞もあるかわりに、芭蕉が決して見られなかった風景や新しい句境を発見できるかもしれないと、私はおもった」との気概を示した。そして芭蕉の代表句「夏草や 兵どもが 夢の跡」への対応句として「夏草や 車列乗り打つ（蹂躪する）夢の跡」を詠み、「山麓を走る国道四号線に車列の切れ間がなかった。延々とつづく車の列は、史蹟を蹂躪しているように見えた。車列が乗り打つ風景は、芭蕉が絶対目にできなかった場面である」と詠句の動機と背景について語っている⁽³⁾。

このように、注意すべきは、明治の文明開化以降、芭蕉が当時見たであろう景色とは交通網の整備などの人工的な要因によって必ずしも同様でない点である。更に、自然災害による要因では、二〇一一年三月十一日の東日本大震災で発生した大津波によって日本三景の一つである松島を擁する三陸のリアス式海岸は地形と景観が大きく変貌した。芭蕉が「松島は笑ふがごとく、象潟は憾むがごとし」と形容した松島とは対照的な象潟は、既に一八〇四年の直下型大地震で海底が二m四〇cm隆起し、潟の海水は失われて現在は水田となっている。点在した島々は丘陵となつて往時の姿を偲ばせるが、芭蕉が訪れた当時は小舟を浮かべ遊覧できる潟湖だったのである。

ここで、人間の寿命とはスケールが相違する五百年、千年単位のスパンで森羅万象を俯瞰する視点と、「無常」（この世の一切のものは常に生滅流転して永遠不変のものはない）という観念について考えさせ、俳諧の本質を示す「不易流行」（時代を超越して永遠に変容しないことと、時代に対応して流動すること）という理念の理解へと繋げたい。それは、様々な情報が日々氾濫する現代において、ともすれば流行を追い求めがちな若者に、有限の人生を無限の言霊に託すことができる俳句という表現方法に興味を持たせたいからである。また、震災被害による悲惨な光景をも客観視して詠んだ長谷川耀氏の「焼け焦げの 原発ならば 彼岸かな」「一望の瓦礫を照らす 春の月」⁽⁴⁾等、俳句が写真する凄みについて知らせたいからである。

三 自作俳句の指導と実践

三― 身近な俳句

日常生活において自然や人事を自己の年齢や境遇から観察し素直に五七五で表現すれば身近な俳句は詠める。その証拠として、新聞の文芸欄には必ず短歌と俳句の欄が設けられており、老若男女が思いのままに投稿し、評者によって選ばれている。

また、俳句は観察力と表現力を養うのに格好の言語活動である。『小学校学習指導要領^{第1章各教科}第2節国語』も「伝統的な言語文化に関する事項」(1)「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

(ア)易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。と謳っており、「短歌の五・七・五・七の三十一音、俳句の五・七・五の十七音から、季節や風情、歌や句に込めた思いなどを思い浮かべたり、七音五音を中心としたリズムから国語の美しい響きを感じ取りながら音読したり暗唱したりして、文語の調子に親しむ態度を育成するようにすることが重要である。……各地域に縁のある歌人や俳人、地域の景色を詠んだ歌や句を教材にすることも考えられる。また、短歌や俳句を自分でもつくってみたいという気持ちをもつように指導することも大切である。実際につくってみることで、よさを実感し、音読することの意義を深く理解することになる」⁽⁵⁾との解説がある。

若者にとつて身近なのは、新聞よりもペットボトルである。授業中の机上に置くのはマナーに欠けるが、逆手にとつて興味を持つ機会としたのが次の新俳句である。

第22回伊藤園新俳句大賞・佳作特別賞（16歳10名10句、個人名は省略する）を紹介する。国内における俳句創作の公募コンテストとしては応募作品数日本一を誇る。募集要項には「テーマは自由です。自分で感じたこと、思ったことを季語や定型にこだわることなく、五・七・五のリズムにのせてのびのびと表現してください」とあるが、次の10句は冬の季節を詠んでいるので、秋から冬にかけての後期開講科目としては時宜に適っている。但し、口語調が強い現代的な句ではあるが。

「北風に ゆられ鳴いてる ふらここよ」「冬の窓 落書きたちが 笑ってる」「マフラーと 輝く月と 帰り道」「雪だるま さいこのちから ふりしほる」「空高く 綿雪ひらり 踊ってる」「島で観る 街とは違う オリオン座」「風の声 冬の訪れ

教えてく」「冬の暮れ 光のはしごの かかる空」「冬の空 心も体も 白くなる」「冬空を ながめるあまり 時忘れ」がパッケージに掲載されていることに気づいた学生は新鮮な驚きを隠せない。「蕉風の超俗の俳句には『花鳥風月』といった和歌的な情趣が継承されている」などと抽象的な説明をしても敬遠されるが、同世代の若者が作った具体的な例句を示すと「これなら私にも作れそう」な気持ちになる。かくして、出席カードの裏面へ自作俳句を書かせ、次回までに最も良かった句を選定し授業の冒頭で紹介するミニコンテスト（平均約百句回収）の試みを始めた。

三―二 俳句作りの方法

まず、「五・七・五の定型で表現する」だが、これは日本語に内在している言葉のリズムである。交通安全の標語「飛び出すな 車は急に 止まらない」や火災予防の標語「火の始末 人に頼むな 任せるな」等からも分かるとおり、聞きやすく覚えやすい。字余りや字足らずになることもあるが、内容の引き締まった韻文となるよう、六音節や八音節の固有名詞（地名や人名）なら仕方ないが、四音節の季語（名詞）なら一音節の助詞（テニヲハヤ）で調節するなど、できるだけ定型に収まるよう工夫させる。その際、音節数と文字数を混同しやすいので、「漢字仮名交じり表記にルビを振るか、全て一字一音の平仮名にしてみて数えなさい」と指導する。

次に、「季語を入れる」だが、俳句歳時記の分類基準、春夏秋冬に新年を加えた季別と、時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物の項目による体系を示しつつ、日本には四季を六等分した二四節気（立春・雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨・立夏・小満・芒種・夏至・小暑・大暑・立秋・処暑・白露・秋分・寒露・霜降・立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒）、各節気を三等分（初・次・末）した七十二候という自然の移ろいに従った旧暦に基づく豊かな季節感があつたことを知らせる。そこから、太陽の運行や月の盈虚による時間意識と、生きとし生けるものが存在する空間意識を目覚めさせ、折々の花鳥や句の食材など身近な素材から季語を探させる。

次に、「切れ字を入れる」だが、俳句は「俳諧の連歌」の発句が独立したものであるが故に、発句には以下に連ねる如何なる句でも思案できるような独立性が求められ、強く言い切ることが必要とされた。そこで生み出されたのが「切れ」である。代表的なものに「や」「かな」「けり」がある。間投助詞「や」は五・七いずれの末尾

にも用いられ、直前の言葉（主に名詞）が強調され大枠を提示し、一七音節の短詩一句を二つの世界に分けてイメージを広げる。「切れこそ句の命」と言われる所以である。絵画だとキャンバスとデッサンの関係になる。終助詞「かな」は一句の最後（体言あるいは活用語の連体形）に付けて感動的な詠嘆の意を添える。過去の助動詞「けり」も一句の最後（活用語の連用形）に付けて断定的な詠嘆の意を添える。また、余韻も生み出す。三語とも音調を整える働きもある。この三原則を踏まえながら、上五・中七・下五の三句体の語順と組み合わせを考え、読み手に想像の余地を与え、句の世界へと誘うことができれば上出来である。対象物を仮に別の事物と見做して句を作る「見立て（なぞらえ）」の技法が巧みに使えればなお良いが、初心は素直な叙景と叙情が伝わるように指導する。

三―三 選定した秀句

さて、指導者として見本を示しておく必要はあろう。俳句の専門家ではない素人の拙い句だが、朝な夕な学窓から眺める卯辰山の冬の光景を「初雪や 白装束の卯辰山」と詠んでみた。卯辰山は東金沢の神奈備山とも言える身近な里山である。芭蕉の「荒海や 佐渡に横たふ 天の河」に倣い季語に地名を加えた。「白装束」は、初雪に初詣で出会う白装束の神官の姿と色彩のイメージを重ねた擬人法である。そこで、選定基準も「なるべく季語に地名を加えたものが望ましい」としてみた。

地名を重視した理由は、その土地の名前は地理・歴史・環境といった風土性を反映した文化的な記号であり、古来の地名には言霊が宿していると信じるからである。次に、今回の選定基準に合った五つの秀句を私の補足を含む評と共に紹介しておく（個人名は省略する）。授業では観光課ウェブサイト等の映像も探して見せた。

渡り鳥 羽を伸ばして 河北潟

評 季語は「渡り鳥」（秋・動物）、地名は日本海沿岸にある内灘砂丘で堰き止められてきた海跡湖（元は汽水湖だったが、干拓され現在は淡水湖）の「河北潟」である。秋になって渡って来る鳥、反対に帰って行く鳥を共に渡り鳥と普通に呼ぶが、俳句では渡って来る鳥、雁・鴨を始めとする冬鳥類を渡り鳥として作る。春・夏に来る夏鳥は群を成さないで、この冬鳥類の壮観には到底及ばない。それを地元でよく知られた水辺の地名を入れて詠じた点と、集団飛行による束縛や疲労の状態か

ら解放されて、のびのびと自由に振る舞う意の「羽を伸ばして」という表現が、水辺で休息する長閑な水鳥の姿と掛詞のように重なってイメージが膨らむ点が良い。

氷見港の 天然鰯の 舌ざわり ↓上五は「氷見港や」と切れても良い。

【評】季語は「天然鰯」（冬・動物）、地名は「氷見港」である。季語「鰯」は体長九〇センチくらいの温帯魚で、秋から春にかけて産卵のために陸岸沿いに回遊する。厳寒期の寒鰯は脂がのって非常に美味。大きさにより名が違う。稚魚は鰵・稚鰯と名が変わり、六〇センチ以上のものが鰯と呼ばれる出世魚で縁起物。盛漁期の頃に鳴る雷は「鰯起こし」という。能登を含め北陸地方では、雹や霰と共に猛烈な風が吹き荒れ雷が激しく鳴り響く日があるが、漁師にとっては冬の鰯漁が始まる合図であり、多くの北陸人にとっては冬の到来を告げる風物詩となっている。「氷見の寒鰯」というブランドイメージを喚起するキャッチコピー風に仕立てた点が面白い。

木場潟と 映える白山 冬景色 ↓上五は「木場潟や」と切れても良い。

【評】季語は「冬」（冬・時候）、地名は「木場潟」「白山」である。前回のおくのはそ道の授業で夜空に浮かぶ月が松島湾の水面に映る景色の絶妙さについて触れたが、ご当地では木場潟の水面に日本三名山の一つ霊峰白山が映る景色もまた絶妙である。嫺やかな稜線のイメージから御祭神は白山比咩大神（菊理媛尊）という女神である。養老元年（七一一）泰澄大師によって開山され信仰の対象となった。古代から豊かな水の恵みを齎し平野部は稲作や酒造で栄えた。白山にまつわる伝説や昔話も多い。「自分の地元です。冬の晴れた日は雪化粧した白山が木場潟より見えます」というコメントからは、一幅の絵画のような故郷の原風景に対する憧憬と愛着が窺える。

雪吊りや 兼六園の 神髄か

【評】季語は「雪吊り」（冬・生活）、地名は「兼六園」である。日本三名園（水戸偕楽園・岡山後楽園）の一つに数えられる回遊式（池・築山・御亭・茶屋）の庭園である兼六園は、加賀百万石の文化を映す歴史的文化遺産。優れた景観の代名詞「六勝」とは対照の美を演出する宏大・幽邃・人力・蒼古・水泉・眺望を指すが、宋代の書物『洛陽名園記』に由来する。江戸時代歴代藩主が雅な遊びに興じたが、明治七年（一八七四）、全面的に市民へ開放され、大正十一年（一九二二）に国の名勝指定後は観光の象徴となった。雪の付着で樹木の枝が折れないよう縄を張り、保持する雪吊りという冬の風物詩を造園業の奥義の如く「神髄」とした点が斬新である。

初雪を 集めて寒し 浅野川

【評】季語は「初雪」（冬・天文）、地名は「浅野川」である。浅野川は石川県金沢市の富山県の県境に位置する順尾山（八八三m）付近に源を発し北流。金沢市街地を流れ金沢市湊で大野川に合流する二級河川。古くは河北郡（加賀郡）と石川郡の郡境の役割を果たし、下流部は倉月荘（現在の鞍月地域）を構成した。下流に沿って北陸鉄道浅野川線が走る。犀川のおとこ川に対し、おんな川と呼ばれる。架かる橋も風情があり、泉鏡花の名作『義血侠血』を始め、小説やドラマの舞台となっている。芭蕉の「五月雨を あつめて早し 最上川」の初案「涼し」に触発された句だが、冬の浅野川散策は雪花が舞い、風情を楽しみむより「寒い」という体感が先立ち凍える。

四 今後の課題

芭蕉は「俳諧は三尺の童にさせよ、初心の句こそたのもしけれ」（服部土芳『三冊子』）と述べた。この言に共鳴し学生にも見たまま感じたままを素直に詠むべきことを指導した。その結果、写実性の高い右の五秀句を得た。今後は「写真で記録、俳句で記憶（瀬戸内・松山 写真俳句コンテストコンセプト）」の表現を目指したい。実地踏査が最善だが、次善は「故郷の地名を代表する景観を映像で見せ、句の季語を含んだ俳句を詠む。逆に俳句を詠み、相応しい映像を見る」でも良いと考える。手軽に携帯でき操作も簡単なデジタルカメラが普及した今日だから活用させたいが、むしろ課題は言語力であろう。なるべく「美しい」等の形容詞は直接には用いず、そういった事物の性質や状態は「花鳥風月」の季語の類に託して表象できるだけの語彙力を是非身に付けさせたい。

注

- (1) ドナルド・キーン訳『英文収録 おくのはそ道』（講談社学術文庫、二〇〇七年四月）等。
- (2) 『NHK趣味悠々 おくのはそ道を歩こう』（日本放送出版協会、二〇〇七年九月）
- (3) 『森村誠一セレクション 名鑑地100選 おくのはそ道ベストスポットガイド』（角川学芸出版、二〇一〇年 非売品）
- (4) 長谷川權『震災句集』（中央公論新社、二〇一二年一月）
- (5) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』（東洋館出版社、二〇〇八年八月）